

牧草園藝

夕張郡長沼町
雪印種苗
中央



放牧期間の延長のために

北海道農業試験場草地第一研究室

宮下 昭光

1. 目的

放牧期間を延長する目的は、乳用育成牛や肉用牛の飼育コストを舎飼い時に比べ3分の1から4分の1に軽減する。放牧時には1日1頭(体重250kg)当たりの飼料費は30円前後で0.6~1.0kgぐらいの増体が期待される。

これに対し舎飼い時において同程度の増体をさせるために必要とする費用は120円ぐらいになる。

北海道においては放牧期間は150日前後であって、5月中旬より放牧を始め、10月中旬頃に終わっている。

本州南部の雪の少ない地域でも200日を越す例は少ない。

北海道内の肉牛飼育地帯において慣習的に12月より1月頃まで放牧を行ない、また終年放牧を肉牛、馬によって行なっている地域がある。

外国(ニュージーランド・北欧)なども放牧期間延長に古くより計画的にこの手段遂行の草地を準備、放牧利用して畜産経営の発展に大きく寄与している。

北海道は9月中~下旬に降霜がある。この時季になると牧草の生育が停滞し放牧牛にじゅうぶんな採草活動を展開させることがむずかしくなる。

このようなことをさける手段として、春より低い草丈で輪換放牧利用を行ない、草生を改善し、秋の生育を向上させることが図られてきたが、期間延長を期待どおり大きく達成することはできなかった。

10月中旬の放牧終了を30日後に移行できれば、舎飼い期間のために要する粗飼料をいままでの6分の1に減少することができ、省力化にもたらす効果はたいへん大きい。

公共草地、個人草地を問わず晩秋用草地の利用技術が活用されれば、放牧期間延長、草地の合理的利用に大きな利益が期待されよう。

2. 準備する基本的考え

放牧期間延長に利用する晩秋草地を計画的に放牧頭数に準じ、日数を定め必要面積を考えなくてはならない。放牧期間延長の可能な期間は地域によってかなりの開きがある。例えば雪の少ない太平洋沿岸地帯と多雪の内陸のように。

大事なものは放牧期間延長に強くともられると気象の激変(とくに予想外に降る雪)に晩秋利用の目的や効果を削減してしまうので、地域の自然を生かしてあまり無理のない手段をとる必要がある。

3. 草地の選定

9月中旬から下旬になると降霜があるので牧草は葉

部の凍結と融解をいく度かくり返す。このためにラジノクローバは黒変萎凋し品質が極度に悪化してしまうので、イネ科牧草が優先する草地を選定することがのぞましい。現在の放牧草地はオーチャードグラスが中心となっているが、他にも低温に比較的耐えるケンタッキープリュウグラス、ペレニアルライグラス、メドウフェスクなどをとり入れた草地の利用も考えられる。

4. 準備時期と面積

晩秋放牧草地の準備をいつの時点で行なうとよいかについて北農試内で検討した結果、8月上旬と中旬に準備した草地が、下旬と9月中旬に準備した草地に比べ目的にかなった好成绩をあげた。

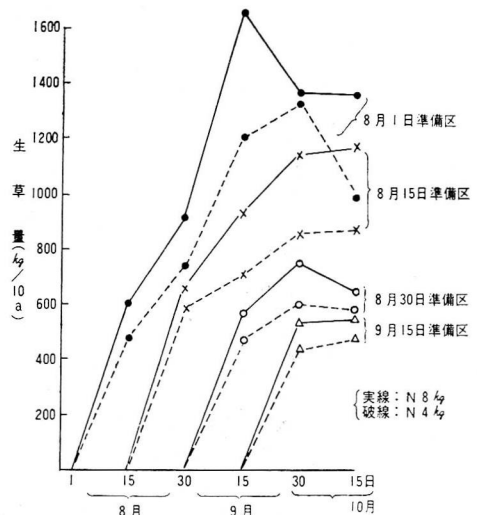
すなわち第1図にみられるように早く準備した草地ほど牧草の生育量が高い。遅い草地の場合は、気温の低下にともない生育量は低きに終わった。

晩秋放牧を一定期間行なううえに、牛の必要草量をじゅうぶんにみたしうるようには8月上旬~中旬に準備することが札幌付近ではのぞましい。

必要とする草量を生産する草地面積は家畜の種類、頭数などまた放牧日数によって決定されなければならない。

例えば乳用育成牛(体重250kg)が水分80%含む生草の必要量は50kgである。育成牛10頭を30日放牧延長しようとする15tの草が必要になる。

これを生産するには1haの草地を8月上旬に窒素を多目(成分量で8~10kg)に施すと必要草量を確保できる。



第1図 準備開始時期と生育推移